

「雑踏の中の孤独」

何も見ていない様な
虚ろな目つきをして
長い間に身に付いた
頹廢の悪臭を放ち
いつの頃からか臆病に
なった
背中を丸めて
狂った街
渋谷の群衆に 蹠踉めき
ながら
私は急いでいた 何処
へ？

犇めき合う人混みの中
雑然たる観念で頭をひ
っくり返し
馬鹿馬鹿しい孤独を抱
えながら
惚けた様にぶつぶつ独
語していた

噫 癩に障る

どの顔を見ても のっぺ
らぼうだ

噫 癩だ 癩だ

私も同じ様な顔を曝し
ているとは

そして

誰もが此の滑稽劇の主
役であるとは

私は全てに唾棄した

誰が誰であろうと構わ
ない

私が私自身であるなら
ば

雑踏に紛れ 肩と肩をぶ
つけ合い

人波に眼を回し乍ら

徐々に歩調を速めると
精神が急速にぐらつき

始めた

馬鹿げた妄念が頭を擡
げる

噫 私の人生観が何だと
言うのだ

私の思想が何だと言う
のだ

私の信仰が何だと言う
のだ

私も群がる蟻に過ぎない
とは！

ここにいる誰一人として

私は説得出来ないとは！

不意に叫び出しそうにな
った私は

吐き気を催しながら
一目散に群衆から脱け
出した

いつの間にか 辿り着いたのは

人気も無く閑散とした
夜の渋谷クロスタワー
のテラスであった

私は呆然とその場に立
ち尽くし

街を行き交う人々を眺
めていた

ふと横に眼をやると 青
年が独り座っていた

彼もまた 哀しそうに街
を眺めていた

そして

夭折した詩人の記念碑
の前で

寂しげな背中をこちら
に向けたまま

古びたギターを抱えて
歌い始めた

聴いていたのは 私独り

だ

純粹で澄んだ声は

狂った街に 勇敢に挑み

掛かる様であった

それは

美しくも儂いプロテス

トソングであった

私は無性に話しかけた

くなっただが

青年の孤独が それを拒

絶していた

